

● シリーズ 私の見た日本 Vol.238

記憶に根ざす風景と暮らし

——建築を学びながら見つけた日本と中国のちがひ——

肖 遥 (ショウ ヨウ)

中国・広州生まれ。日本語学校を経て、2022年より近畿大学建築学部在学中。建築デザイン専攻、空間デザイン研究室所属。



日本留学と建築を学ぶきっかけ

子どもの頃に初めて日本のアニメを見てから、日本という国に少しずつ興味を持つようになった。作中の言葉や風景、暮らしの様子に惹かれて、気がつけば日本の文化に対する関心が芽生えていた。

高校に入ってから、大学入試で英語の代わりに日本語を選ぶことを決めて、高一の頃から本格的に勉強を始めた。高二になってからは、日本に留学したいという思いがだんだんと強くなり、いつかそれが自分の目標になっていった。コロナの影響もあり、ようやく日本に来られたのは2020年の11月だった。日本語学校に通ったあと、2022年4月から近畿大学の建築学部に入學した。

建築に興味を持ったのは、それよりもずっと前。たぶん、小さい頃の記憶がきっかけだったと思う。私は中国の広州市で生まれ育った。ちょうど3歳の頃、街の新しいシンボル「広州タワー」の建設が始まり、8歳のときに完成して一般公開された。設計図が公表されて、ゼロから少しずつ高くなっていく様子を、毎日の生活の中でずっと見ていた。完成が近づいた頃には、全

国からタワーの名前を募集するというニュースもあって、街全体がその話題で盛り上がっていたのをよく覚えている。

街の風景が少しずつ変わっていくのが楽しくて、人々の関心を集める建築に対して「すごいな」と思った。あのときのわくわくした気持ちは、今でもずっと心の中に残っている。それが、建築を学びたいと思った最初のきっかけだったのと思う。

にぎわいと静けさのあいだにある日常の風景——公園という空間について

私の記憶の中で、「公園」という言葉はいつも「開放的」「公共性」「自由な活動」といったキーワードと結びついている。

中国において、公園は都市の中で非常に公共性の高い緑地施設として機能しており、多くは行政や関係機関によって計画・整備され、一般市民に向けて開放されている。たいていの公園は年中無休で無料開放されており、都市の中心部であれ、住宅地の周辺であれ、さまざまな年齢層の人々が日常的に集まる場所になっている。朝の太極拳、午後の将棋やチェス、

夕方のダンス、そして休日の家族団らんや子どもたちの遊び場として、にぎわいに満ちた空間が広がっている。中国の公園は、都市に暮らす人々が共に過ごす「リビングルーム」のような存在であり、活気があり、人とのふれあいにあふれた、あたたかい場である。

一方で、日本における「公園」の概念はより多様で、都市の緑地や自然保全区域だけでなく、住宅地内の小さな休憩スペースや児童遊園なども含まれている。日本でも公園は生活の中の憩いの場として存在しているが、その規模や雰囲気は中国とは大きく異なる。特に都市部の住宅地に点在する小さな街角公園は、滑り台やブランコなどの遊具と、整備された緑、清潔なベンチが並び、静かで整った空間となっている。それはまるで生活の「余白」のように、自然と人との距離が保たれた、控えめで穏やかな場所である。

私が初めて日本に来たのは2020年の終わり頃で、ちょうどコロナ禍の最中だった。外出を控え、屋内にこもる日々が続くなかで、天井のない場所で息をつくことができる数少ない選択肢が、家の近くの小さな公園だった。そこには中

国の公園にあるようにぎやかさも、人の声や音楽もなく、ただ木漏れ日の中を風に乗って舞う落ち葉や、時折通り過ぎる住民の静かな会話があるだけだった。

そんな静寂の中で、私は作品集のラフスケッチを描くようになった。ベンチに座りながら、何も無い空間に思考を広げ、静けさの中で設計と向き合う時間が、日々のリズムの中に自然と溶け込んでいった。中国の公園が与えてくれる「にぎわい」と「人の気配」が私にとっての安心感であったとすれば、日本の公園がくれる「静けさ」と「余白」もまた、心を落ち着けてくれる大切な居場所となった。

もちろん、日本の公園がすべて静かなわけではない。住宅地を離れた大きな公園では、週末になると散歩やピクニック、ギターを弾く若者たちの姿が見られ、時には季節のイベントも開催される。中国の公園が「いつ行っても何かが起こっている」のようにぎやかさを持っているのに対し、日本の大きな公園は、週末やイベントなど、特定のタイミングでふっとにぎわう「点的」な活気があるように感じた。

この二つの異なる風景を体験する中で、私は人と空間の関係性について深く考えるようになった。そして建築を学ぶ者として、空間が単に機能を果たす場であるだけでなく、人々の日常の感情や生き方にそっと寄り添い、それをかたちづくる存在であることを、少しずつ実感するようになった。

住まいのかたちと暮らしの感覚

日本に来てから、日常の中で建築や住まいのかたちに意識を向けるようになった。日本語学校に通っていた頃、毎日通学路で一戸建ての住宅が並ぶ街並みを歩いた。住宅街を抜け、バスに乗ると、さらに多様な風景が広がっていた。なかでも、屋根の形に目を引かれた。斜めに切り落とされたような独特な勾配屋根があちこちに見られ、中国で見慣れてきたフラットな屋根とは大きく異なり、とても新鮮に映った。最初は単なる違和感として受け止めていたが、そうした「違い」を毎日の中で見つけていくうちに、建築がその土地の文化や気候、暮らし方と密接に関係していることに気づきはじめた。それは、私が建築を学ぼうと決めた気持ちを、より強く後押しするきっかけにもなった。

日本の住宅街でよく見かける一戸建ては、中国の都市部ではあまり一般的ではない。中国の住宅といえば、基本的には高層マンションのような集合住宅が主流である。一戸建てに近い形態の家も存在はするが、それらは多くの場合「別荘」と呼ばれ、郊外に位置する。私自身の感覚では、日本の一戸建てと中国の別荘は、見た目こそ似ているものの、生活の背景や価値観においてはまったく別のものだと感じている。日本の一戸建ては、土地に根ざした生活スタイルや地域性に支えられた、日常の選択肢の一つであるように思う。

暮らし方の違いは、実際の生活を通して随所に感じられた。私は日本で一人暮らしをしているが、住んでいるマンションは静かで安心感がある。日本に来る前は、中国のように都市のあらゆる場所に監視カメラが設置されていない環境に、不安を感じるのではないかと少し心配していた。しかし実際はその逆で、目に見える「監視」がなくとも、街全体にどこか落ち着いた秩序と信頼のような空気があり、心から安心できた。もう一つ興味深かったのは、住まいの「玄関前」の扱い方の違いである。中国では、多くの家庭が玄関の前に小さな敷物を敷いたり、春節の時期には春聯や逆さまの「福」の文字を貼ったりと、パーソナルな装飾を加えるのが一般的だ。観葉植物や靴箱を外に置く人も多く、空間を「家の延長」として使うような感覚がある。一方で、日本の住宅では、集合住宅でも一戸建てでも、玄関先に個人的な飾りを施すことはほとんどない。外から見える部分を整えつつも、過度に個性を主張しない——その姿勢か

らは、他者への配慮や、公共と私的空間の線引きに対する意識の違いが感じられた。このような些細に見える部分にも、その国ならではの文化が現れているのだと思う。

屋根のかたちや、玄関の一枚の敷物といった、日常のほんの些細な違いのなかにこそ、暮らしの文化は色濃くにじむ。それらに気づき、感じ取ることが、私にとっての「建築を学ぶ」ということの一部になっている。日本での生活は、異国の中での建築体験であると同時に、私自身の暮らしの記憶をかたちづけてくれているように思う。

日本で建築を学ぶようになってから、建築とは単なる技術や形式の追求ではなく、「人」と「暮らし」の関係性を読み解く手がかりののだと、少しずつ実感するようになった。旅が単なる名所巡りではなく、その土地の人びとの営みを感じることで深まっていくように、建築の学びも図面や規格の知識だけで完結するものではないと思う。

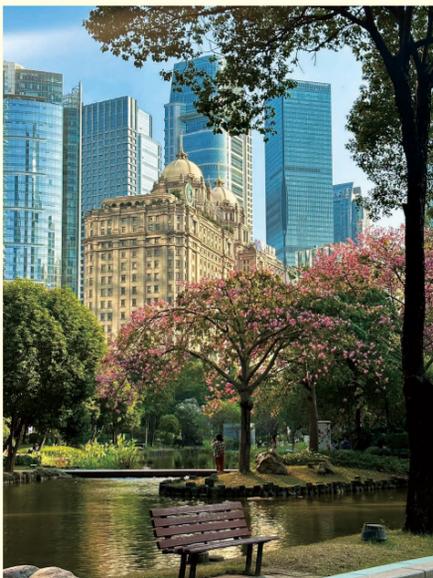
心を動かすのは、日々の暮らしの中にある空間との向き合い方であり、それぞれの土地で人びとがどんなリズムで生き、どのように場所を使い、自分らしい居場所を見つけているのか——そうした断片の一つひとつである。無数のささやかな生活の断片が、私にとっての「建築」のはじまりであり、いばはんリアルな理解になっている。だからこそ、この道をもう少し歩いてみたいと思っている。建築を通して暮らしに近づき、人にもっとやさしく寄り添えるようになりたい。



新今里公園



広州・花城広場



広州・花城広場



広州・天河公園



広州・天河公園